
時空を越えた超戦士～序章～

かのもの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空を越えた超戦士〜序章〜

【Nコード】

N4364X

【作者名】

かのも

【あらすじ】

ドラゴンボールの世界には分岐した未来が複数存在する。

これは、その中の一つ人造人間たちによって地獄と化した未来。ここから、新たな未来が分岐する。

人造人間を倒すために修行を続ける孫悟飯に齎された人造人間に対する手段。

それを手に入れるべくドクターゲロの研究所に向かう悟飯に、思いがけない運命が待ち構えていた。

これは、ドラゴンボールZと魔法少女リリカルなのはStrike
rsのクロスオーバー作品の前日談ですが、この作品自体はドラゴ
ンボールZのみの二次小説作品です。

前編

孫悟空とその仲間達が駆け巡った世界。

便宜上『ドラゴンワールド』と呼称しよう。

この世界の未来が分岐し、幾つもの並行世界が生まれていることは読者諸兄もご存知だろう。

第一の未来は、全てのZ戦士達が死に絶える世界。

宇宙の帝王フリーザとの戦いの後、悟空が心臓病で亡くなり、その半年後、ドクターゲロの造った人造人間17号、18号により、この世が地獄と化す世界。

人造人間は生みの親であるドクターゲロを殺し、その驚異的な力を持って人間たちを次々と虐殺していった。

破壊活動を続ける彼らを倒すべくZ戦士達が立ち上がったが、その圧倒的な強さの前に次々と殺されていった。

その14年後に生き残っていた孫悟飯が殺され、戦士はベジータとブルマの息子トランクスのみとなってしまう。

彼は一度、母であるブルマが作ったタイムマシンで過去に行き、未来の危機を悟空たちに伝えるが、自分の時代に戻り、人造人間の弱点を見つけ何とか倒す事に成功する。

だが、人造人間の弱点を伝えるに再び過去に向かおうとするトランクスの前に現れた人造人間セル。

彼は17号、18号を吸収することで完全体へと進化する筈が、トランクスによって2人が倒された為に過去に戻り完全体に至ろうとトランクスを殺し、タイムマシンを奪って過去へと向かっていった。

第二の未来は、我々が良く知る『正史』。

フリーザ親子が地球に來襲した時、未来からやってきたトランクスが本来、悟空が倒す筈だったフリーザ親子を倒した事と、第一の未

来からやって来たセルによって変わった未来。

完全体となったセルが『セルゲーム』開催し、超サイヤ人を超えた超サイヤ人『超サイヤ人2』孫悟飯がセルを倒し、平和になった未来。

その後、魔人ブウ、ベビー、スーパー17号と数々の強敵が現れるが、孫悟空の手によって倒された。

そしてドラゴンボールの使いすぎによって溜まったマイナスエネルギーから生まれた邪悪龍との戦い。

最強最悪の敵、一星龍との戦いの後、孫悟空は神龍と一つとなり、死を超越した存在となり、姿を消した。

第三の未来は、『正史』から戻ってきたトランクスが平和を勝ち取る世界。

トランクスが第二の未来から自分の時代に戻り、人造人間17号、18号を圧倒的な強さで倒し、更にその3年後タイムマシンを奪いに来たセルを倒し、第一の未来とは別の結末を迎える。

これらに共通するのは、トランクスがタイムマシンで過去に赴いたことによって分岐した未来である。

しかし、トランクスというファクターに関係なく分岐した未来が存在する。

これは、第一の未来から分岐した誰も知らない第四の未来のお話である。

物語は、ピッコロ達が殺されてから半年後から始まる。

エイジ767年。

「じ…人造人間だ…！人造人間が現れたぞ…！」

オレンジスターシティに現れた二人の悪魔、人造人間17号と18号。

「ハハハハッ！さあ、逃げろ！早く逃げないと殺しちゃうぞ！！」

「逃げられるわけないけどね……」

人造人間たちは指先からエネルギー波を放ち、逃げ惑う人々を狙い撃っていた。

「そこまでだ！人造人間！！」

「うん！？」

「何だお前！？」

「格闘技世界チャンピオンのミスターサタンだ！お前たちの悪行もこれまでだ……！今まで事前に爆弾を仕込んだトリックを使っていた様だが、この私には通じんぞ……！！」

「お……サタンだ！」

「ミスターサタン！あんな奴等、早くやつつけてくれ！」

「サータン！サータン！！」

オレンジスターシティが誇る世界チャンピオン……彼らの英雄であるミスターサタンの登場に、住民たちはサタンコールを上げた。

「いくぞ！ダイナマイトキック！！」

サタンのキックが17号の顔面にヒットし、そのままパンチやキックを猛ラッシュで打ち込むが17号は微動だにしなかった。

「……………くだらん。お前はもう死ねよ！」

17号は事も無げにそう言うと、ミスターサタンの胸に手刀を突き入れた。

「ウギャツ！そ…そんな…」

サタンは胸部を貫かれ、そのまま息絶えた。

「………！？」

自分たちの英雄があっさりと倒されたことに呆然となる住人たち…

やがて、脳が事態を認識し恐慌に陥った。

「サ…サタンが…！」

「サタンが殺られた…！」

「た…たすけてくれ…！！」

逃げ惑う人々を再び襲う人造人間たち……。オレンジスターシティは破壊されつくし、一人の少女を除き死に絶えた。

「……パパ……」

その少女はミスターサタンの亡骸の傍らに蹲っていた。

「……だ…誰か…。誰かあいつらを倒して、パパやみんなの仇を討つて~~~~~!!」

少女の悲痛な叫びが、廃墟と化したオレンジスターシティに響き渡った。

Z戦士唯一の生き残りである孫悟飯は母・チチの制止を振り切り、かつてピッコロと一緒に修行し、ベジータ達サイヤ人と戦った地で、人造人間達を倒すべく修行に打ち込んでいた。

ピッコロやクリリンといった親しい者たちが殺され、悟飯はその怒りで父・悟空と同じ超サイヤ人スーパーに覚醒していた。

しかし、同じく超サイヤ人に覚醒していたベジータも人造人間たちには敵わなかった。

悟飯も今のままでは勝てない事は理解していた。

故に、ラジオで人造人間がオレンジスターシティを襲撃したことを聞いても、まだ手を出せなかった。

もう、戦士は自分しかない……。

ベジータの息子のトランクスはまだ幼すぎる。

無謀に出て、殺される訳にはいかなかった。

「お父さん……。お父さんさえ生きていたら……」

どんなにとんでもないことが起こっても、父・悟空さえ生きていれば、絶対に何とかしてくれるのに……。

今の悟飯には、悟空の代わりは出来なかった。
そんな自分に対する怒りと悔しさを鎮め、修行に打ち込んでいた。

幾日か過ぎたある日、悟飯が修行をしていると近くにジェットフライヤーが墜落して来た。

「な…何だ!？」

悟飯は訝しみながら、墜落現場に向かった。

「……………うつつ…」

ジェットフライヤーに乗っていた老人は、なんとか生きていたが既に時間の問題だった。

どうやら、怪我だけではなく、病んでいる様だった。

「おじいさん…しっかりしてください…」

「ど…何方か…存ぜぬが…頼みを聞いて…てください…。この地図には…人…造人…間たちを造ったドクターゲロと言う…男の研究所の位置が…記されています…。きっと…そこには、人造…人間たちのデータが…残されて…いる筈…それを、何処かの有能な…科学者に…見せれば…きっと…人造…人間達の弱点が解…る筈…どうか…ワシに代わって…それを…を…」

老人は悟飯に地図を託すとそのまま息を引き取った。

「……ドクターゲロの研究所!？」

悟飯は、老人の言葉を噛み締めていた。

何故、気付かなかったのか？

奴等の力は科学の力で生み出された物……ならば、人造人間のデータを有能な科学者に見せれば……幸い、悟飯には有能な科学者という人物に心当たりがある所ではなかった。

「人造人間のデータをブルマさんに見せれば、きっと人造人間の弱点が解る!みんなの仇を討てる!!」

悟飯は、地図に記されたドクターゲロの研究所に向かうため、飛び立った。

この老人との出会いが、第四の未来へとつながるファクターだった。

前編（後書き）

ドラゴンボールとなのはのクロス作品は結構目にします。

自分でも書きたくなったので、とりあえず今回は予告編。

大体、3話くらいです。

あらずじでも書きましたが、この話自体はドラゴンボールのみです。

その後、時空を越えた黄金の闘士終了後、本編を書く予定です。

では、これからも私の作品にお付き合いください。

中篇

到着した悟飯が見たのは、既に破壊された研究所だった。

「……くそ！人造人間たちはドクターゲロを殺した後に、研究所も破壊していたのか？」

しかし、それでもせつかく来たのだから、何か役に立つものがないか探すことにした。

瓦礫を退かしていくと、地下室への入口を見つけた。

「……そうか……。人造人間達は地下室の存在を知らなかったのか」

考えてみれば、人造人間達の元は、ドクターゲロとは何の縁もない、何処にでもいそうな不良の少年、少女である。

狂人的な科学者が、そんな輩に自分の研究所の全てを教える筈がなかった。

地下室を降りた悟飯が目当たりにしたのは、未だに稼働を続けるコンピュータと、培養カプセルにある不気味な幼虫のような姿をした胎児……であった。

培養液のカプセルの名札には『ネムレットCeセルll』と刻まれていた。

「……な……この気は！？」

『セル』から感じる微かな気は、父・悟空と師・ピッコロ……ベジータ、そして宇宙の帝王フリーザとその父・コルド大王の気だった。そして、こここの設備はこの化け物を成長させる為のモノであること気付いた。

「……お父さん達の気を持つ化け物……もしこんな奴が成長したら……
……人造人間たち以上の脅威となる」

悟飯の背に冷たい汗が流れていた。
そしてふと、デスクに目を向けると無造作に拡げられている紙を見つけた。

「……これは……間違いない。人造人間たちの設計図だ！」

これをブルマに見せれば人造人間たちの弱点が解る。

悟飯は設計図を丸め左手に持つと、再びコンピュータと『セル』の方に視線を向けた。

「……悪いが、地球の為にもお前のような奴を見逃すわけには行かない！」

悟飯は右手を『セル』に向けると気功波を放ち、培養カプセルの中の『セル』を塵一つ残さず消滅させた。

その後、コンピュータも完全に破壊し、研究所を後にした。

そして、ブルマの居る西の都に向かって飛び立とうとした時……今、最も遭いたくない奴等と遭遇してしまった。

「……確か、孫悟空の息子の孫悟飯……だったか？」

「へえ……。こいつ生きていたんだ……」

人造人間17号と18号だった。

偶然か、それとも運命の悪戯か……たまたまこの近くを飛んで移動中だった人造人間たちと鉢合わせをしてしまった。

「……こいつ何か持ってるよ」

「……このあたりは確か……ドクターゲロの研究所のあった……!?」

先ほどまで小馬鹿にした表情をしていた17号の顔が鋭い表情に変わった。

「貴様…それはゲロの研究所から持ち出したモノか？」

17号は、かつてドクターゲロが作った緊急停止コントローラーの存在を思い出した。

ドクターゲロは言う事を聞かない二人に対する予防策として、強制的に2人の活動を停止させるコントローラーを持っていた。

隙を突いてそれを破壊し、ドクターゲロを殺したとはいえ、自分たちの設計図さえあれば、他の科学者でも、作成可能な代物である。

「……どうやら、この場で確実にお前を殺さなければならなくなっただな……」

なし崩し的に戦闘が始まった。

悟飯は超サイヤ人に変身し戦ったが、実力差は覆しようがなかった。更には、設計図を守りながらの戦いなのだから、尚更であった。

超サイヤ人に目覚めたとはいえ、今の悟飯は悟空にもベジータにも追いついていない。

悟飯の攻撃はまったく通用せず、17号、18号の攻撃に為す術もなく、甚振られ続けた。

「あの頃よりは多少強くなったようだけど……まだまだだね……」
嘲るように18号は呟いた。

「悪いが今回は確実にトドメを刺させてもらっぞ……」

風前の灯火となった悟飯の命……その時だった。
悟飯達から100mくらい離れた場所に宇宙からの落下物が降って来た。

「何だあれは!?!」

「……あれは……サイヤ人の……フリーザ軍の……宇宙……ポッド……!?!」

17号と18号は悟飯の胸倉を掴みながら、宇宙ポッドに近づいていった。
ポッドの扉が開き、中から長身で上半身裸の物静かそうな優男が出てきた。

「なんだアイツ!?!」

「宇宙人か!?!地球に来るとはご苦労な事だな……」

17号たちの声に反応したのか、優男が視線を向けてきた。
そして17号が掴んでいる悟飯の姿を見て、その静かそうな雰囲気が一変した。

「カカロットオオオオオオオオ!!!!」

男の髪が逆立ち金色に変化した。

「ス……超サイヤ人!？」

悟飯は、この男がサイヤ人である事を知り驚愕した。

ベジータの話では、純潔のサイヤ人は悟空とベジータ以外存在して
いないと聞かされていたからだ。

最も、実はターブルという名のサイヤ人でありながら戦闘に向かな
い性格のベジータの弟も生き残っていたのだが……。

その男は無造作に人造人間たちに気功弾を放ってきた。

とっさに躲した二人だが、予想を上回る威力に吹き飛ばされた。

「…せつかくの服が汚れたじゃないか！」

激昂した18号が、超サイヤ人に突撃していった。

「フン！」

「な…何ッ!？」

18号は、超サイヤ人の無造作に繰り出されたパンチを受け、胴体
を真っ二つにされ爆発した。

その時、18号の懐から小さな宝石が零れ落ちた。

「ば…馬鹿な…18号がたった一撃で…!？」

驚愕した17号は悟飯を放り投げ、超サイヤ人に向かっていった。
パンチとキックを猛ラッシュで超サイヤ人に繰り出すが、微動だに
しなかった。

「……そんな馬鹿な……ぐあー!!」

17号は、超サイヤ人のパンチを受け吹っ飛んだ。

17号の心に今浮かんでいるのは恐怖であった。

因果応報なのか、今まで相手を甚振る側だった17号は立場が反転し甚振られる側になっていた。

「ち……畜生……。俺は最強の人造人間……人間なんかにやられて溜まるかああああああ!!」

17号は最大規模のエネルギー波を超サイヤ人に向けて放った。
エネルギー波は直撃し、あたり一体を吹き飛ばした。

「どうだ……」

だが……砂埃が晴れて目にしたのは無傷の超サイヤ人の姿だった。

「ち……畜生……この化け物め……!!」

17号はやけっぱちになり特攻した。

「……俺が化け物?……違う、俺は『悪魔』だ!」

超サイヤ人はそう呟くと、左手に気を溜めそれを突撃してくる17号に投げつけた。

「う……うわあああああああ!!」

直撃した17号は、爆砕した。

17号をあっさりと殺した超サイヤ人は倒れている悟飯に近付き、その顔を凝視した。

「……違う…カカロットじゃない…。カカロットは何処だあああああああああ！！」

超サイヤ人は悟飯を蹴り飛ばし、周辺の破壊を始めた。

「……奴は……お父さんを求め……て、この地球に来た……のか……」

悟飯は道着の帯に結んである袋を開き、中から仙豆を一粒取り出し、それを飲み込んだ。

体力と傷が一気に回復した悟飯は、破壊活動を続ける超サイヤ人を睨み付けた。

人造人間は倒された。

しかし、地球が平和になつたわけではない。

人造人間を倒した男はそれ以上の悪魔であり、地球人は滅亡の危機に晒されることとなった。

皮肉にも、人造人間は殺戮を楽しんでいたので、地球人を全滅させたら楽しみが無くなるから、じわじわと地球人たちを殺していたが、超サイヤ人は一気に地球人を全滅させるだろう。

なぜなら地球を滅ぼしても、他の惑星で暴れられるからである。

「……ここで奴を倒さなければ、地球は終わりだ」

悟飯は決死の覚悟で、超サイヤ人に向かっていった。

仙豆により死の縁から蘇ったので、サイヤ人の特性により戦闘力が上がったが、それでも人造人間に殺された当時のベジータ級になつたに過ぎない。

そのベジータをあつさりと殺した人造人間をこれまたあつさりと殺した超サイヤ人に敵う筈も無く、悟飯の攻撃を受けても先ほどの17号の時と同様、超サイヤ人は微動だにしなかった。

「…邪魔だ！」

超サイヤ人は悟飯にパンチを食らわせ、回し蹴りを放ち、走りながら悟飯を蹴り上げ、最後に気功弾を撃ち込んだ。

「うわあああああああああ！！！」

悟飯は再び半死半生と化して倒れ伏した。

「……だ……駄目だ……力が……足りない……」

悟飯は何度絶望を味わっただろう。

サイヤ人襲来時に、ピッコロがナツパの攻撃から自分を護り死んだ時。

ギニュー特戦隊のリクームに殺されかけた時。

フリーザにクリリンが殺された時。

悟空が心臓病で亡くなった時。

ピッコロや仲間達が人造人間に殺された時。

超サイヤ人に覚醒し、人造人間達に挑んだが、手も足も出ず敗走した時。

そして、今、この時。

今まで、何度も絶望した。

特に悟空が死んで以来、力不足を嘆き、無力感を味わってきた。

「俺は……このまま何も出来ず……死んでいくのか……」

トドメを刺すべく倒れている悟飯に近付いていく超サイヤ人は、歩いている最中に先ほど18号の懐から零れた宝石を踏み砕いた。その瞬間、地球が……否、次元そのモノが震動した。次元震と呼ばれるモノが発生したのだ。

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

「うわあああああああああ！！！」

超サイヤ人と悟飯は、次元震によって発生した次元の裂け目に墮ちて行った。

中篇（後書き）

突如現れた超サイヤ人。

まあ、プロリーなんですけど……。

さて、次回後編。

プロリーに対抗すべくあの男が悟飯の危機に駆けつけます。

その男の正体とは……！？

まあ、勘が良い人は誰だか解るでしょうが……。

では、これからも私の駄文にお付き合いください。

幕間（前書き）

予定を変更して、後編の前に幕間を入れます。

幕間

エイジ790年に起こった邪悪龍との戦いの後、孫悟空は神龍センロンと共に次元空間の狭間にある『超越空間』で眠りについていた。

『超越空間』とは、超越者以外は余程の天文学的な確率でしか行くことが叶わぬ、正に全てを超越した場所である。

超一星龍を超ウルトラ元気玉でマイナスエネルギーごと浄化した後、神龍と一つとなり界王神すら越えた超越者となった悟空は、マイナスエネルギーの完全浄化の為、眠りについていたのだ。

悟空……悟空……目を覚ませ！

「……ふあああああ！何だよ神龍……もう100年くらい経ったのか？」

神龍に起こされた悟空は、欠伸をしながら訊ねた。

……違う！何者かがこの空間に迷い込んだようだぞ……

その天文学的な奇跡が起こったようであった。

「……あれは……まさか……悟飯と……ブロリー！？」

どうやら、我々とは別の可能性の世界から、この空間に跳ばされたようだぞ……

「……確かに、まだ子供ん時の悟飯だ……」

悟空が最後に別れた時の悟飯の年齢は32歳。

この空間に跳ばされた悟飯はどう見ても10歳にも満たない子供である。

恐らく…お前が心臓病で死に、人造人間によって地獄と化した世界から更に分岐した世界から何らかの力によってこの空間に跳ばされたのだろう…ここは、あらゆる世界、あらゆる時代に繋がっている場所だからな…

意識がないのか、悟飯とブロリーはどんと流され、別世界への出口に流されていった。

……2人とも『異世界』に跳ばされてしまったぞ……

「いけねえ……悟飯は兎も角、ブロリーを野放しにしたら、別の世界の人間にすげえ迷惑がかかるぞ……」

悟空は、ブロリーの恐ろしさを骨身に染みて知っている。

行くのか？悟空……

「ああ。すまねえが例え別次元とはいえ、この目で見た以上、悟飯を見捨てる事はできねえし、ブロリーを放っておく訳にもいかねえ……」

まだ、マイナスエネルギーは完全に浄化出来ていない……。簡単な『願い』しか叶えられんぞ……

「とりあえず、オラを現界させることは出来るんだろ？」

それくらいなら大してマイナスエネルギーは発生しない……

「…じゃあすまねえが、オラを悟飯とブロリーが跳ばされた世界に
現界させてくれ！」

容易い事だ……

神龍の目が光を発すると、悟空の姿がこの『超越空間』から消え去
った。

幕間（後書き）

はい。次回こそ間違いなく後編です。
もうしばらくお待ちください。

後編（前書き）

我ながら、相変わらずの滅茶苦茶な設定です。

ブロリーの台詞……ほとんど「カカロット」だけですわね……。

とりあえず、後編をどうぞ。

後編

「……………ここ…は？」

意識を失っていた悟飯が目を覚ました時、辺りの景色が変わっていた。

「……………一体…ここは何処なんだ…？」

あたり一面、先ほどまでいた場所ではなく、草一本生えていない不毛地帯のようだ…。

「……………あの超サイヤ人は…此方に向かって来ている…けど…それ以外の人間の気が感じられない…。」

感じるのは先ほどまで戦っていた超サイヤ人と、人間とは違う獣たちの気が感じられなかった。

「……………カカロットオオオオオオオオ！」

そして、今、目の前に超サイヤ人が迫っていた。

仙豆はまだ残っているの、食べれば直ぐに体力は回復するだろう…。

しかし、もはや悟飯に為す術はなかった。否、初めから為す術があった訳ではない。

自分が齒が立たなかった人造人間をあっさり倒してしまうような相手に勝てる訳がなかったのだから…。

周りの風景を見て、ここが地球ではないことは理解できた。

何故、いきなり地球以外の場所に来てしまったのか、その理由はわ

からない。

しかし、地球が目の前の悪魔から救われたのは確かなのだろう……。ならば……。もう何の憂いもなかった。

死ぬのは怖くなかった。

死ぬのはあの世で父や師……。そして仲間達と再会できる。

母と祖父を残して逝くのは忍びないが、大好きな皆に逢えるのは嬉しかった。

「……お父さん、ピッコロさん……。クリリンさん、ヤムチャさん、天津飯さん、餃子さん……。俺……。いや、僕ももう直ぐそちらに逝きます……。……」

超サイヤ人は、右手に気を溜めるとそれを悟飯に向かって投げつけた。

悟飯は目を瞑り、目前に迫る死を待った。

しかしその時、何処からともなく飛んできた気功弾が、超サイヤ人の放った気功弾を相殺した。

「……カ……カカロット！」

「……お前の好きにはさせねえぞ……。ブロリー！」

声に反応し、悟飯は目を開けた。

そして、その目に写ったのは……？

「……お……。お父……。さん！？」

「……大丈夫か……。悟飯？」

涙が滲んできた。

当時、生まれたばかりの赤子ながら戦闘力100000だったブロリーは、隣に寝ていた戦闘力たった2の力カロットに泣かされてしまった。

その屈辱がトラウマになり、ブロリーは悟空への憎しみを募らせた。悟空達が怒りによって超サイヤ人に覚醒したのに対し、ブロリーは悲しみによって超サイヤ人に覚醒した。

故に、悟空達とは系統が違う進化をした超サイヤ人なのだ。

正史において、未来から来たトランク스가変身した超サイヤ人第三形態のように、筋肉が肥大化しているにも関わらず、肉体に掛かる負担も無く、スピードも落ちないという規格外。

二段階目の変身にも関わらず、超サイヤ人3をも凌駕する戦闘力を誇っていた。

「……昔のオラだったら、一人じゃお前には勝てなかった……。だが、今は違うぞ！」

悟空の気が爆発し、閃光が広がった。

閃光が晴れ、ブロリーと悟飯が目にしたのは、これまでの超サイヤ人とは異なる黒い長髪、目の周りが赤く縁取られ、首から上と胸部以外が赤い体毛に覆われた姿となった。

「……な…なんだそれは!？」

流石のブロリーも動揺していた。

サイヤ人最強の筈の自分に匹敵……いや、もしかすれば凌駕するかもしれないパワーを感じたからだ。

「……俺は超サイヤ人4、孫悟空だ！」

超サイヤ人4。

大猿状態の強力なパワーと、大猿には無い超スピードを併せ持ち、性格が冷徹かつ好戦的になり、また、従来の超サイヤ人、特に超サイヤ人3の欠点でもあった激しいエネルギー消耗による肉体への負担とそれに伴う変身時間の減少といった問題は超サイヤ人4への覚醒によって解消された、まさしく超サイヤ人の最終形態である最強の戦士。

「行くぞブロリー!!」

「カカロットオオオオオオ!!」

超サイヤ人4対伝説の超サイヤ人の戦いが始まった。

悟飯は、再び仙豆を食べて回復していた。

目の前で行われている超バトルが夢ではないことを悟り、そして圧倒されていた。

人造人間を苦も無く倒し、そして自分がまったく歯が立たなかったブロリー相手に、悟空は互角以上に渡り合っているようだ。

今の悟飯では、目の前の超バトルを視認することさえ、至難の業だった。

「……やっぱり…お父さんは強い!」

元々悟飯は純血のサイヤ人である悟空やベジータと違い、戦いを好まない性格をしていた。

今でも決して戦いが好きというわけではない。

しかし父が亡くなり、師や仲間達が次々と人造人間達に殺された時に感じた怒りと無力感が、戦う事に対する躊躇いを消し去った。

そして、平和を護れる強さを求める様になった。
今、悟空から発せられる凄まじい気に羨望を感じていた。

「……敵わないなあ……」

父に憧れ、父のようになりたくて父の着ていたモノをアレンジした道着を着る様になった。

でも、やはり格好だけ真似ても強さまでは真似は出来なかった。

最も、目の前の悟空は違うタイプの道着を着ていたが……。

目指す背中は、限りなく遠かった。

それでも、悟空の強さは悟飯にとって誇りだった。

「やっぱり、いつかお父さんの様に強くなりたい……。大切な皆を護れるくらい強く……」

悟空の様に強くなる。

悟飯は再度、心に誓った。

悟空とブロリーの戦いは半日続いていた。

最初の頃は悟空が優勢だったが、徐々にブロリーが強さを増していったのだ。

やはり伝説の超サイヤ人は伊達ではなかった。

父・パラガスが指摘した様に、ブロリーはサイヤ人そのモノなのだ。戦闘民族サイヤ人。

戦えば戦うほど強くなる。

ブロリーは戦いの中で強さを高め、今や超サイヤ人4に迫るまでになっていた。

「……相変わらずの化け物っぷりだな…ブロリー…」

悟空は戦慄し、そして残念に思った。

ブロリーが全てを破壊する悪魔ではなく、いい奴だったら…ずっとこのまま戦い続けたかったのに……。

「……ブロリー…お前もウーブみたいがいい奴になって生まれ変わって来い。そしたら今度は、心行くまで戦ってみてえな…」

悟空は、魔人ブウの生まれ変わりである自分の弟子を思い浮かべた。

「ブロリー…これで最後だ…10倍かめはめ波を受けてみる!」

悟空は決着をつけるべく、かめはめ波の体勢をとった。

「かあ……」

両手首を合わせて手を開いて、体の前方に構え。

「めえ……」

腰付近に両手を持っていく。

「はあ……」

体内の気を集中させ。

「めえ……」

溜めにより気が掌に満ち。

「波あ~~~~~!!」

両手からブロリーに向かって撃ち放った。

従来のモノとは比較にならない威力のかめはめ波がブロリーに迫る。

「カカロットオオオオオ!!」

それに対しブロリーは、左手に気を溜め、相手に向かって投げつけるイレイザーガンで対抗した。

10倍かめはめ波とイレイザーガンはぶつかり合い、空中で燻っていた。

驚くべきことに既にブロリーの強さは、超サイヤ人4の悟空と互角にまで達していたのだ。

かめはめ波とイレイザーガンのぶつかり合いから発せられた凄まじい衝撃が、辺り一面を吹き飛ばしていた。

悟飯も吹っ飛ばされないように地に付けた足を踏ん張り、必死に留まっていた。

「……………このままだとブロリーは、超17号や一星龍くらいまで強くなっちまうな…。そうなら…この世界は終わりだ…」

今、悟空とブロリーが戦っているこの世界は無人世界だが、資源が豊富なので他の世界から次元航行艦がよく立ち寄り、資源を採掘していくらしい。

ブロリーが次元航行艦を乗っ取り、他の次元世界に移動したら……。今、この場でブロリーを倒して置かなくてはならなかった。

「スーパーかいおうけん
超界王拳!」

悟空も約一年ぶりの父のぬくもりを感じながら泣きじゃくる悟飯を抱きとめ、その頭を撫でていた。

「……………そうだったんですか……………」

泣き止んだ悟飯は、悟空から説明を受けていた。今、目の前に居る悟空は自分のいた次元とは違う次元の悟空であること。

そして、悟空の世界がどの様な歴史を辿ったのかを……………。

「……………でも、お父さんが心臓病で死なずにいてくれた世界があつて……………嬉しいです……………」

正確には、心臓病で死ななくても結局悟空は死んでしまうが、その7年後に老界王神の命を貰って生き返るのだが……………。

そして自分が幼い頃からの夢だった学者になれた世界が存在している事を知り、なんとなく嬉しくなったのだ。

今の悟飯は、既に学者になるという夢を抱いていない。

今の悟飯の夢は、悟空の様に強くなることなのだから……………。学者になるという夢を捨てた事に後悔はない。

しかし、違う世界で自分が夢を叶えた事で、完全に未練が無くなったのだ。

「……………それにしても……………ドラゴンボールにそんな性質があつたなんて……………」

願いを叶える事に発生するマイナスエネルギー。

それを浄化するには100年必要であり、ドラゴンボールを乱用す

るとマイナスエネルギーが暴発し、邪悪龍という宇宙を破壊する存在が生まれる。

そして、中には超サイヤ人4の悟空すら凌駕する強さを持っている者もいるという。

ピッコロが死んで、神様もいなくなり、悟飯の世界のドラゴンボールは無くなってしまった。

ドラゴンボールがあれば……と、何度もそう思った。

しかし、ドラゴンボールにそんな性質があるなら、みだりに使うことなんて出来ない……。

やはり自然の摂理を歪めるドラゴンボールは、老界王神がいう様にまじめなナメック星人以外、使用してはいけないのだろう。

「……ところで…俺は元の世界に戻れるんでしょうか？」

「……………」

悟飯の呟きと共に、悟空の表情が曇った。

残念だが……それは不可能に近い……

「エッ…この声は……神龍!？」

辺りに神龍の声が響き渡り、説明を始めた。

そもそも悟飯と悟空達は同一世界の時間軸が違う存在。

如何に神龍といえど、作り主である神…つまりデンデの力を超える事は出来ないので並行世界に干渉は出来ないのだ。

悟飯とブローリーは天文学的な確率で、悟空と神龍が眠っていた『超越空間』を通過して異世界に跳ばされた。

異世界という元の世界と繋がりが無い世界だから、悟空達は悟飯とブローリーに接触できたのだ。

並行世界の時間軸の元の世界に戻すことは出来ないのだ。
悟飯も何となく理解していた。
伊達に学者志望だった訳ではない。

「…………正直、元の世界に戻れないのは辛いです。…………でも…、あの世界の地球も人造人間の脅威から解放されたんだ…………。だったら無理に戻る必要もないですね…………」

自分の手で救ったわけではないが、それでも、もう人々が人造人間に怯えながら生活しなくても済む。
それは確かに喜ばしい事である。

本人にそのつもりはまったく無いが、結果的にブロリーは地球人の恩人となった事だろう。

何処かの世界で言う『反英雄』として、英霊の座に至れるかも知れない…………。

メタ発言はほどほどにな…………

神龍が突っ込みを入れた。

「なあ、神龍：なんとかなんねえのか？」

済まぬが私の力でもどうにもならない…………。それに悟空、そろそろ限界が来ている。唯でさえブロリーとの戦いが思った以上に長引いてしまった。これ以上お前を現界させるのも、苦しくなって来ている…………。

「じゃあ、このまま悟飯をここに置き去りにするって言うのか？」

そうではない。私に出来るのはせいぜい近くの有人の次元世界に

送るくらいしか出来んと言っているのだ……

悟空も分かっている。

それが自分の我儘だということを……。

「お父さん……いいんですよ……。元々、ブロリーとの戦いで死を覚悟したんです。もう俺の世界において人造人間の脅威は無くなりました。この次元世界を危機に晒してまで元の世界に戻る必要もありません……。それに、一人の生活にはもう慣れましたし……。」

人造人間を倒すために家を飛び出して以来、悟飯は一人で修行しながら、野生生活をしてきたのだ。

「異世界に跳ばされた事で、もう一度……たとえ別次元の存在とはいえ、お父さんに逢えたんです……。俺は、それだけで……夢の様に幸せです……。」

「……悟飯……すまねえ……悟飯！」

悟空は、また悟飯を強く抱きしめた。

こうして悟飯は、近くの世界に送られた。

その世界の山岳地帯に居を構える事にした。

悟飯の手に一冊の書物があった。

これは、悟空の全ての技の習得方法や、今まで悟空が受けた修行の内容などが記載されていた。

悟空が、せめてもの餞別として、神龍に頼み作ってもらったのだ。

(悟空には自分の修行方法を書き留める様な学は無いので神龍に作ってもらった)

とりあえず、これから悟飯がする修行は、超サイヤ人に慣れる事であった。

超サイヤ人に変身すると落ち着きが無くなり、凶暴性が増し、軽い興奮状態になる。

その為、超サイヤ人になると体に大きな負担が掛かるので、日常で常に超サイヤ人に慣らす事によって、超サイヤ人になったときの落ち着きの無さを消す事で、戦闘力を上げてても体に掛かる負担を克服するのが目的である。

これは、別れ際の悟空に口頭で最初に薦められた修行である。体への負担が減る事により、超サイヤ人の力をフルに使うことができる。

本来超サイヤ人は、力をフルに使いこなせば、17号や18号よりも強い。

しかし、体に掛かる負担が体力を奪っていくので超サイヤ人の実力を完全に発揮できなかつたのが、ベジータや悟飯が人造人間達に敗北した理由なのだ。

日常で超サイヤ人ではいるには、街に出るより、人が来ない山岳地帯に居る方が修行がしやすいのが理由だ。

勿論、山育ちなので、知り合いが誰一人も居ない世界での都会暮らしなどが性に合わないという理由もあるが……。

こうして、悟飯の異世界での生活が始まった。

第四の未来は、孫悟飯が異世界に跳ばされる世界。

そして物語は、これより一年後から始まる

後編（後書き）

これで、序章は終了です。

後日、設定と本編の予告を執筆します。

設定に関しては、私の独自設定が混じっていますので、それに関する苦情は受け付けませんのであしからず……。

本編は予定通り、「時空を越えた黄金の闘士」完結後に執筆します。

では、これからも私の作品にお付き合ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4364x/>

時空を越えた超戦士～序章～

2011年10月29日03時13分発行